

# 中国文化と日本文化の相違点

## —— 言語から見た中国文化と日本文化の相違点 ——

崔 春 基

### 一 はじめに

有形無形の文化財は言うに及ばず、家具や道具などにも文化現象が見られる。文化現象が見られるのは何も文化財や家具・道具だけではない。一つの民族や一国の国民が普段使っている言語にも、文化現象が見られる。そこで、ここではその言語における文化現象を中心に見ていくことにするが、当然なことながら違った言語には違った文化現象が見られるので、中国の文化と日本の文化を云々する場合、すなわち、中国の文化と日本の文化の違いを論ずる場合、中国語と日本語をその土台にして見ていかなければならない。しかし、ここでは単に言語による文化の違いだけに限定するのではなく、言語以外のところから見られる文化現象で、言語に現れる文化現象の裏付けをすることも有ることを断っておきたい。

### 二 「只好他去」と「彼が行くしかない」

さて、中国語と日本語の違いの一つに次のようなのが有る。中国語は、「只有一個人」(一人しかいない)、「只好他去」(彼が行くしかない)のように、「只有～」、「只好～」のような形で、存在や動作を限定しているのに対して、日本語は、「一つしかない」、「それなら彼が行くしかない」のように、「～しかない」のような、否定の形で、動作や状態を限定する。すなわち、中国語は、肯定の形で状態や動作を限定しているのに対して、日本語は、否定の形で、状態や動作を限定する、という大きな違いが有る。中国語の、「只好他去」を、日本語の形のように直して、「只好他不去」と言ってみると、「彼が行くしかない」の意味とは反対の意味の「彼が行かないということしかない」という意味になってしまう。また、「今

天只有他一個人不看電影」のようなものも、形だけは日本語の、「今日は彼一人しか映画を見ない」のようにになっているが、実は、「今日映画を見ないのは彼一人だけで、あとは全員映画を見る」という意味になり、決して「今日は彼一人しか映画を見ない」と言う意味にはならない。

このような中国語と日本語の表現上の違いは、動詞を用いる場合だけの違いではなく、形容詞を用いる場合でも見られる現象である。すなわち、これは動作を限定する場合だけではなく、状態を限定する場合でも見られる現象であるが、例えば、日本語の場合、「この辺ではこの山しか高くはない」と言うと、この辺で高い山はこの山だけで、他の山はみんな低い、と言う意味になるが、中国語の場合、「這一带只有這座山不高」と言うと、「この辺ではこの山だけが低くて、他の山は全部高い」という意味になり、決して「この一带ではこの山だけが高い」と言う意味にはならない。だから、中国語の場合は「這一带只有這座山高」だけが日本語の「この辺ではこの山しか高くはない」に対応する。このように、中国語は「只好他去」、「只有這座山高」のような、肯定的な言い方で、動作や状態を限定するのに、日本語は「彼が行くしかない」、「この山しか高くはない」のように、否定の言い方で動作や状態を限定する。

以上述べたことから、中国人は、いろいろな動作・状態から、ある動作・状態を限定する場合、限定された動作・状態の他の動作状態は、否定をせず、ただ選択外の物として置いておくだけであるが、日本人は、いろいろな動作・状態からある動作・状態を限定する場合、限定した動作・状態の他の動作・状態は、全部否定してしまう、ということが容易に理解できよう。これは即ち、中国人は、いろいろな動作・状態から、ある動作・状態を限定しても、それが唯一の物ではなく、他にもまた有りうると見るが、日本人は、いろいろな動作・状態から、ある一つの動作・状態を限定すると、それが唯一の物で、他には何もないと見る、ということである。

ところで、元々、言語という物は、民族の客体に対する見方であって、客体を客観的に反映した物ではないので、上述の、中国人の見方と、日本人の見方が違ってくるのは、当然なことであり、しかも、中国人の見方と、日本人の見方が、それぞれ自国の国民性を持つものと、見ることができるのではないかと思う。

従って、中国人のある動作・状態を限定する場合の、限定した可能性の他にも、なんらかの可能性が常に有り得るという見方、即ち、「車到山前必有路」（事態が八方塞になっても、必ず解決策はどこかに有る）と見る見方と、日本人の動作・状態を限定する場合の、限定した可能性の、他の可能性はない物とする、いわば「背水の陣を敷く」「赤壁の戦い」としか見ない見方は、それぞれ社会性と国民性を持つ、違った見方であるといえることができる。しかも、この中国人の見方と日本人の見方は、社会性と国民性を持つので、文化現象といえることができると思う。そこで、二つの文化現象を、ここでは便宜上、それぞれ、事態を「車到山前必有路」と見る文化、事態を「赤壁の戦い」と見る文化、と言ったり、或いは、「只好～」文化、[～しかない]文化と言ったりすることにする。

さて、上述の二つの文化は、それを所有する人たちの行動から見るることができる。現在中国と、日本の間では、何かと交渉が多いようであるが、交渉によってはその解決策がなかなか見つからず、じりじり延びて、交渉の最後の日だというのに、中国はのんきに構えることが有る。この最後の日までのんきに構える、これが中国の、「車到山前必有路」の文化である。いくら事態がせっぱ詰まっても中国人は、のんきに構えていられるし、最後の最後まで何らかの打開策が有るはずだと信じ込んで、簡単に諦めるようなことはしないのが、中国人である。

一方、日本人は、「～しかない」と思ったら、その他の可能性はほとんどない物と見て、「赤壁の戦い」のように危機感を感じながら、必死の努力を払って事態を解決しようとがんばる。が、それでも解決の見込みがない物と見ると、今度はあっさり諦めることが有る。

この様に、中国人はどんな窮地に追い込まれても、他に道の有ることを信じ込んで、容易に諦めるようなことはしないが、日本人は窮地に追い込まれると、「～しかない」の他は道がないものと思いがちで、簡単に諦めたり、甚だしい場合は自分を自殺にまで追い込むことさえ有り得る。日本人が中国人より、諦めの早いこと、自殺者の多いことは、中国人同士の間でよく話題にすることであるが、それは正にその通りである。日本人の諦めの早いこと、「～しかない」と思って自殺を図ることは、中国人から見ると、不思議でたまらない行動である。なんでそんなに簡単に諦めるのか、なんで他にいくらでも解決策があるはずなのに、自殺を選

ぶのかと、中国人は不思議がる。

### 三 「只好～」と「～しかない」に見られる文化現象の二つの側面

さて、前では「～しかない」の文化は、諦めやすく、窮地に追い込まれると自殺までしかねないと述べてきたので、それは一種の弱点ではないかと思うかもしれないが、実は、どんな事物であろうと、二つの側面を持つものであるから、「～しかない」文化であろうと、「只好～」文化であろうと、皆いい方向に働く場合と、悪い方向に働く場合がある。そこで、ここでは「～しかない」文化と「只好～」文化の、いい方向に進む場合と、悪い方向に進む場合を簡単に見てみることにする。

まず「～しかない」であるが、限定した行動の他の行動をすべて否定するので、他の行動を取る余裕がなく、わき目も振らず一直線に突き進んで「赤壁の戦い」に追い込まれたように必死で働く（がんばる）ので、計り知れない力とパワーを発揮する長所を持っている。現に日本人がその力を発揮して、世界にも希な成果を上げている。

戦後日本人は窮地から立ち直りかけた頃から、日本は資源もない、食糧もない、だから「働くしかない」と思って「赤壁の戦い」に追い込まれたように必死で働いたので、今日のような経済大国になったのであるが、これが「～しかない」文化の長所である。このことから分かるように、日本人は勤勉で、何かをする場合ありったけの力を発揮し、パワーが有って、しかも自分が限定した動作・状態が実現不可能なものと判断した場合は、無駄な資金や時間などを費やしながらか「車到山前必有路」に掛けて気長に待つことなく、潔く諦める。ところが、窮地に追い込まれた場合、他にも何らかの動作・状態が有りうるということを、あまり考えずに、あっさり諦めることが有るが、これなどは弱点といえよう。

では、「只好～」文化はどうであろうか。これも長・短両方がある、やはり二つの側面を持つ。こちらはある動作・状態を限定する場合、常に他にも動作・状態がありうるということを、念頭に置きながら行動をし、常に「車到山前必有路」と思って、急がず、焦らず、気長に働くし、事態がせっぱ詰まっても必ず他に解決策があると信じて、諦めないこと

は長所といえよう。従って、中国人も、気長に勤勉に働く国民であるといえる。しかし、これが行き過ぎると、怠慢と、「脚踏両只船」（どっち付かず）の無責任の状態に陥ることがある。中国人が早く決断すべきことを、じりじり延ばしたりすると、外国人が良く「大陸的」であるとか、「のんき」であるとか言うが、それは役人の怠慢さと、無責任さをなじって言うものであって、誉め言葉とは程遠いものである。

それから、現在中国では、多くの会社の社員が、落ち付きを失って、あちらこちらに流動しているが、これは正に「脚踏両只船」の行為である（あちらにしようか、こちらにしようかと迷う行為）。しかし、これは何も今に始まったものではなく、科挙制が実施されて以来ずっとあったものである。昔、科挙に合格した官吏達は、常に首になる危険性、上司が入れ替わる危険性などにさらされて、身を守る護身術として、「脚踏両只船」の手段を取っていたが、今のようにおおっぴらな行動には移せなかったはずである。従って、「脚踏両只船」は、科挙時代の「役人文化」とでも言うべき物であるが、現在でも中国が日本より、そういう傾向の多いことは確かなようである。

他社の月給が自社より少しぐらい多くても、他社には移らない日本人から、今の中国のあちら、こちらと移動する従業員の行為を見たら、不思議でたまらないだろう。早くすべきことを、じりじり延ばしたり（「車到山前必有路」の行為）、ある会社に所属していながら、いつも他社に移動することを考え続けたり（脚踏両只船）することを日本人はどう思うのだろうか。

#### 四 終わりに

以上、言語による中国文化と日本文化の相違点を見てきたが、結論として、中国人は、気の長い勤勉な国民で、望みが実現する見込みがなくとも、他に実現の道があると信じて、容易に諦めることはしない国民であるのに対して、日本人は、活動的である勤勉な国民で、望みが実現する見込みがないと判断すれば、潔く諦める国民であるということが言えるのではないかと思う。勿論、中国人の勤勉さと、日本人の勤勉さには、違いがあると思う。その違いを強いて言えば、日本人の方が中国人より

活動的である（せっせと働く国民である）と言えるだろう。

さて、この点に付いては、裏付けが必要であると思うが、中国にも、日本にも、昔は「キセル」という煙草を吸う道具があった。そのキセルをよく見ると、中国の方が日本のより長くて、頭の方が大きいのが特徴的である。同じ中国でも田舎に行くほど短くはなるが、それでも、一般に日本の田舎のキセルよりは長くて頭が大きい。中国で長いのは1メートルをらくに越えるものがあって、煙草を吸う時は、手がキセルの頭まで届かないので、人に火をつけてもらわないと、煙草が吸えない物がある。

しかし、百姓の物は、それほど長くはないが、それでも日本の百姓の物よりは長くて、頭が大きい。柄が長くて頭が大きいということは、煙草をたくさん入れて長く座って吸うということであり、長い物を腰かどこかに差し込んで動かなければならないので、機敏に動くことができないということである。それに比べて、日本のキセルは、短くて頭が小さいのが特徴的であるが、頭が小さいということは、あまり煙草を入れられないので、早く吸い終わるということであり、短いということは、ポケットかどこかに入れて、機敏に動きまわるとのことである。

以上のことから、中国人は働く時、ゆったりとした動きで働き、日本人はこまめに、せっせと働くということが分かる。今の多くの日本人が、中国人は、道を歩く時でも、ゆったりとした歩き方をするが、日本人は、せかせかと歩く、という。それは中国人と、日本人の特徴を良くつかめた言い方であると思う。